

文化



映画「パリ20区、僕たちのクラス」の一場面

移民が集まるパリの中学校を舞台にした映画「パリ20区、僕たちのクラス」。一昨年のカンヌ国際映画祭の最高賞に輝いたが、青春讃歌の物語でもなければ、教師を告発するドラマでもない。何が人々の心に響いたのか。2人の識者に尋ねた。(道又隆弘)

識者が見た

映画「パリ20区、僕たちのクラス」

同志社女子大教授

村瀬 学



むらせ・まなぶ 1949年生まれ。専門は児童文化論。著書に『13歳論』『10代の真ん中で』『宮崎駿の「深み」へ』など。

ヒーローも思わず、劇的な展開もない。でも強く引き込まれる生徒たち一人一人が発する言葉が多様で力強く、教室という小さな空間を驚くほど豊かにしている。いろいろな言葉がぶつかる光景が面白い。難解な仏文法の授業に、生徒たちは「中世みたいだ」と遠

13歳、年齢と言葉の普遍性映す

大人への戸惑いの現れ

慮がない。教師は「公式な言葉に身に付けないと将来困る」と説明するがなかなか通じない。公式な言葉を教える難しさは日本でも同じだが、興味深いのは、教師が上から押しつけたら、対等なコミュニケーションを図るのではなく、大人の価値観を粘り強く伝えようとする姿勢。言葉の大切さを誰よりも知っているという国語教師としての自負を感じる。

大人の入り口に立つ年頃の子どもは、ナイフのように相手を傷つけるため言葉を使う。特に映画の中

の生徒らは否定されて育ったため、暴力的な言葉を多用する。反応を見て、相手の力を測る。それは彼らが世を渡る上で必要なことでもある。そんな時、教師はどうするか。主人公は、時に侮蔑的な言葉を生徒に投げかける。きつかけを作った過ちを理解させるためだが、クラスは一斉に反発。溝は埋まらないが、それでも対話で修正しようとする姿が印象的だ。13〜14歳という年齢は、もう子どもじゃないと周囲に認めてほしいが、大人の振る舞いはできない。そんな矛盾の中で生きている。劇中、教師が自己紹介の作文を課すと、「僕のことば僕しか分からない」と反発もする。いくつもある

京都大人文学研究所教授

竹沢 泰子



たけざわ・やすこ 専門は文化人類学(移民・マイノリティ研究)。編著に『人種の表象と社会的リアリティ』など。

担任教師のフランス語授業で、非白人の生徒たちが「なぜ白人の名前ばかりなのか」「チーズくさい言葉だ」と教師に畳みかける。白人中心の価値観を当然とせず、その正統性を揺るがすという日本では想像できないシーンが次々と描かれる。当然、クラスは混乱する。授業

日本の教育現場と共通点も

その複雑さ、深刻さは「手の施しようがない状況」に映る半面、「正統な仏語習得が成功しない」「正統な仏語習得が成功しない」と説得する教師。一方で、自信を失う若い教師もいる。生徒の言い分も教師の反応もすべて対等で、善悪や優劣の構図はない。移民社会の抱える問題が多角度から、淡々と提示される。

移民社会の問題多角度から提示

暮らすブラジルやベトナムの移民二世の子どもの姿も重なる。彼らは、病院や役所などでも、日本語が苦手な親に代わり、時には学校を休んで通訳を務める。業務に忙殺される教師は、彼らの校外での生活や精神的負担に気付かない。気付いた時はすでに手遅れというシーンには現実の多くの問題が凝縮されていて、胸に迫る。登場する生徒や教師は美点も欠点も赤裸々に描かれる。問題に対する処方せんも示されない。考えるヒントはいくつも埋め込まれているが、安易なメッセージは発されない。問題は解決されないまま明日を迎える、という現実を暗示したラストシーンの後味の悪さこそが、美談では済まない教育現場のリアルな状況を観客に突きつけている。

×70 原作はフランスソフ・ベゴド「著「教室へ」」。著者は元教師で劇中でも主人公の教師を演じる。劇映画だが、舞台は実在する公立中学校。上映。